



ヤドヴィガ・ロドヴィチ=チェホフスカ

私たちの親愛なる「Maro」、霜田千代麿氏の訃報に大変ショックを受けております。彼はとても大切な人で、ポーランド国内外の多くの人々にとってとても重要な人物でした。

最後にお会いしたのは2022年11月、札幌でした。その時は手の力も弱く、かなり衰弱されているようでしたが、もう会えないとは思いませんでした。

お気の毒でなりません。

ご存知のとおり、私の夫のヴァルデク(ワレマール)は彼のとても良い友人になりましたが、彼もこの悲しい知らせに同様に動揺しています。

どうか心よりお悔やみの言葉をお受け取り下さい。私たちは彼のために祈ります。私たちは彼のことを決して忘れません。

私が Facebook*にマロの死についてメモを置いたところ、人々がメッセージや反応を送ってくれました。私はそれらを日本語に翻訳しました。これらのメ

ッセージが翌日の悲しい式典に少しでも良い感情をもたらすことを願っています。



(左から)ルーカス・クロスさん、パヴェウ・ヤニユシユさん Włodzimierz Kwieciński 会長、霜田英麿氏

世界伝統空手道連盟のヴオジミエシュ・クフィエチンスキ会長が式典に出席するために北海道へ行くことを知っています。彼はポーランドのスタラ・ヴィエシュ道場から土を持って行きます。

Facebook からのこれらのメッセージが、私たちの最愛のマロとポーランドの友人たちのお別れのセレモニーに花を添えますように。(Jadwiga Rodowicz-Czechowska 元駐日ポーランド共和国大使)

長屋 のり子

霜田千代麿さんは事もなげに生の果ての回転扉を押して彼岸の人になってしまった。あの何か喉につかえたような、音域の広い独特の声がもう聴けない。死因は「老衰」と聞く。死は、今はもうその悲しみ、寂寥さえ削がれるような、必然の静かさで彼にひっそり舞い降りたと知る。仏教に深く帰依した人の法悦に近い、たっぷりとした仏光に包まれた穏やかな死と知れば、執拗に悲しむまい、と思う。

生前に自分の思うところの全てをやり切った人は稀有に近い。彼は自分の肉体の全部を賭して海を渡り、世界に猪突猛進して、今は伝説(レジェンド)と呼んでいい、あのポーランドでの寺山修司との出逢いをはじめとする奇蹟のような彼の生きた歴史を切り開き集積した。

私の手元に、国際寺山修司学会の分厚い研究誌に掲載された、彼の大部の論文がある。寺山修司と母親との関係を「阿闍世コンプレックス」として扱えたものだ。(因みに彼の大学卒業論文は『運命と宿

業感について～ギリシャ悲劇と観経との照応』副論文『ギリシャ悲劇「オイディプス王」観経「涅槃経」阿闍世王』梗概』

彼は前衛的な「書(カリグラフィ)」「空手」「グロトフスキ実験劇場研修生」等々、マッショな趣味人としての印象が強烈だが、彼の根幹は深く「知」を探る人だったと私は確信している。十数年前、私の企画した加島祥造展(小樽祝津)に千代麿さんは岩見沢から殆ど毎日、足を運び、白鳥番屋に長く滞在した加島祥造氏(当時『求めない』のミリオンセラーで時の人であった!)の前に正座して、「老子、タオ」の思想に、まさに真っ向から日々果敢に喰らいついていた。その時の千代麿さんの眼の光の鋭利犀利一途を私は今も忘れていない。その情熱の量いつも夥しかった。

千代麿さんの私に遺した彼の本質ののぞく俳句

破れたるまゝの蜘蛛の囿(い)クモは吾

逝去の悲しみは悲しみのまま涙拭って
哀悼 愛悼 千代麿さん

See you soon, Catch you later! (ながや・のりこ)

小林 暁子

春の雪消えるが如く君去りぬ 暁子

改めて思い返してみると、霜田千代磨さんとは37年前のポ文協設立準備委員会で一緒に以来、2回のポーランド旅行、3回の池田町への修学旅行、2011年から毎年企画してきた午後のポエジアなど、ずいぶん行動を共にしてきました。

第2回ポーランド旅行の時「夏至」の初代主宰の依田明倫先生が沢山の俳句仲間を誘って参加してくださったのがご縁で、私は今から12年前、千代磨さんに勧められて入会しました。その後、推薦を受けて同人となった「古志」に偶然千代磨さんも入会していました。今考えてみると、生涯多くの事に情熱をこめて取り組んできた千代磨さんが、最後に全身全霊をもってやり遂げたかったのは俳句だったような気がします。

去年の9月8日、「夏至」の主宰・佐藤宣子先生から、

千代磨さんが句集を出すので10月20日までに120句選んでほしい、との電話がありました。そのすぐあと本人からも、選句依頼の電話があり、体調がすぐれず、選句ができないというのです。私が持っている千代磨さんの俳句の資料は、ここ12年の「夏至」「古志」「ポーレ」だけでしたが、意見を交換する時間はもうなかった。「任せるから」という言葉に押し、千代磨さんが残したいだろうと思う句を120句選び、10月16日に主宰にメールで送りました。

千代磨さんにもその旨報告し「とてもいい句ばかりで選ぶのに苦労しました」というと、「ああよかった」と笑っていました。千代磨さんの生きた証の句集は、3月上旬に出来上がりました。



句の道を求め求めて梅の里 暁子

(こばやし・あきこ)



『祖霊祭』による祖霊祭
ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ(編)
スレウヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館 刊 2023.12

Inne, a jednak *Dziady*. (ed.) Jadwiga Rodowicz-Czechowska. Muzeum Józefa Piłsudskiego w Sulejówku

ポーランド・アイヌ『祖霊祭』プロジェクト2022の報告書が発行された。プロジェクトはヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日ポーランド大使が実施されたもので、この報告書にはポーランド語、英語、日本語と三か国語が並んでいる。

骨子は、ポーランドの詩人アダム・ミツキェヴィッチの作品「祖霊祭」と、アイヌ研究者として知られるブロンスワフ・ピウスツキからのアイヌの祖先への祈り(シンヌラップ)を結び付けたものである。

最初にピウスツキの孫である木村和保氏(1955～2022)の言葉が載る。これは2018年の国際会議での発言。祖父であるピウスツキのことから始まるが、研究と称して墓を暴き大学の倉庫に保管しているアイヌの人たちの遺骨が未だに返還されていないことなど。

この件に関しては別のページでも”涙をふいて／聞いてくれ／わたしの／涙も凍る話をな”と土橋芳美著『痛みをペンリウク～囚われのアイヌ人骨』(草風館、2017)から引用して訴える。

ロドヴィッチ氏は「祖霊祭」の内容を中心に、ミツキェヴィッチのことや治癒性のある独自の調味料キハダと言われる木の実のことなどを紹介している(今回の表紙=背景写真=がこの実)。

また2022年7月に札幌エルプラザで行われた「午後のポエジア」での『祖霊祭』の朗読が紹介されている。参加者として村咲紫音、村田譲、林家とんでん平、

氏間多伊子、ラファウ・ジェブカ、菅原未榮、シルヴィア・オレーヤージュ各氏の名前が載っている。

11月のかでる2・7での講演と朗読、シアターZOOでのポーランド・アイヌ祖霊祭“シンヌラップ・クンネニサツ”がアイヌ・日・英/波の三つの言語で表示され、告知ポスターや公演会の様子が写真などによって詳しく掲載されていて、カラフルで見ただけでも楽しい。

この報告書で個人的にいちばん注目したのは「アイヌ語に関するコンピュータと人工知能を用いた研究」というページだった。ブロンスワフ・ピウスツキは1902年ごろから蠟管約100本に生のアイヌ語を録音したのだが、なにせ100年のうちには相当数が紛失。また日本の同化政策によって母語が失われアイヌ語を喋れる方が減少している状況では、アイヌ語に限らず、少数民族の言語は十分な量の学習データが集まらない。では保存や復興にどう対処すべきかと考えて、文法解析や長いフレーズを短い語形に自動分割させるプログラムを開発した。そのために人工知能や自然言語処理という現代の技術が役立つという。Pepperロボとアイヌ語で会話するカール・ノヴァコフスキ博士の様子をミハウ・プタシンスキ博士が撮っている——イランカラプテ。

ユゼフ・ピウスツキ博物館刊、アダム・ミツキェヴィッチ・インスティテュート、ポーランド広報文化センター、北海道ポーランド文化協会が協力している。(村田譲)